

今日の説教のポイント<ヨハネによる福音書 19 章 16 節～27 節>

①ヨハネが記した福音書の特徴

ヨハネ福音書は西暦 90 年頃に記されました。すでに 3 つの福音書があるのに、この福音書が正典とされたのはなぜでしょうか？ イエス様の死から 60 年が経過する中で、イエス様に起こった出来事の本当の深い意味が分かって来ました。この福音書はそれをこれまでの福音書以上によりはっきりと伝えているからです。

②十字架はシモンが担いだのでは？

他の 3 人の福音書記者はキレネ人シモンがイエス様の十字架を担いだと記しています。しかし、ヨハネは、「**イエスは、自ら十字架を背負い**」(17)と書いています。どちらも間違いではありません。3 人は、無理やり十字架を負わされたシモンに注目し(その後信者になった)、ヨハネは、私たち自身が自分の罪のために負うべき十字架をイエス様が代わって負って下さったことを考えているのです。

③罪状書き・衣服の分配・母への思いやり—より深い意味の捉えへ

罪状書きと兵士らによる衣服の分配。これらについては 3 つの福音書も記していますが、ヨハネはより詳しく説明しています。ピラトが過去・現在・未来を示す 3 つの言語で「イエスは王なり」と示すことになった皮肉な宣言。また、「兵士達がイエス様の衣服を分け合ったことは、詩編 22 編 19 節を見よ。そして、この詩編 22 編全体からイエスの死について考えよ」、と示すヨハネ。さらに、残して行く母マリアをイエス様が思いやる姿は、この福音書で初めて知らされる内容です。「母親なんだから当然」ではありません(「婦人よ」(26)という呼びかけに注目)。愛して止まない「人間の代表」としての母マリアに示された、神様の自己犠牲の愛。私たちはこの福音書から、イエス様の十字架の出来事の意味を深く聞き取らなければなりません。

④十字架のイエス・キリストを知るとき、私たちも変わり得る！

『世界』(1-4 月号)に、カミュの『ペスト』について宮田光雄先生が書かれていました。伝染病の蔓延で絶望が支配する中、それでも自分のためでなく他者のため、市民のために命を捧げて仕える人々。主イエスの十字架の意味について深く考えさせられ、励まされました。